

思い込み態度の構造分析 —批判的思考力との関連について—

Structural Analysis of prejudiced impressions: Relationship to Critical Thinking Skills

田村 圭佑
TAMURA Keisuke
(オーグス総研)

米澤 好史
YONEZAWA Yoshifumi
(和歌山大学教育学部)

日常生活における思い込み態度の形成過程を思い込み態度に影響を与えるパーソナリティ要因、認知的要因を分析し、思考力や思考態度との関係を明らかにすることによって解明した。素朴概念のような常識的に培われた課題を突破するには規範への反発のような周りに捉われない態度を持つておくことが必要であり、規範への反発は迷信や習慣への批判的態度を軽減させる可能性も見出された。迷信の柔軟な姿勢での批判、習慣の不偏的な視点での批判、規範の公的関係に対する柔軟な肯定の態度を持つこと、疑いすぎる批判的な態度を持たないことは論理的な批判的思考力と影響し合っているが、批判的思考態度は論理的な面でのみ影響があることが示された。批判的思考の多視点的思考態度面は思い込み態度と関連し、論理的思考態度面は推論吟味の批判的思考力と関連することが示された。

キーワード：思い込み態度・批判的思考・メタ認知・パーソナリティ・素朴概念

1. はじめに

私たちの生活の中には思い込みというものがある。占いや超能力、超常現象、霊やUFOの存在など例には事欠かない。身近な例では血液型性格判断も今や性格の理論としてよく知られTV番組でもよく取り上げられ、「血液型によって良し悪しがあり、いじめなどの問題となる」から番組を控えるようにという申し入れが起こったほどである。心理学においては、血液型と性格の関連は認められないというのが常識だが、日常会話の中でもほぼ当たり前のように血液型による性格や相性が話題とされるようになってきている。そしてこうした思い込みが起こす弊害もまた多い。例の中で挙げたようにそれのみで人の性格を決めつけてしまい、過度になるとその人に対し偏見や差別意識を抱くことにもなりかねない。また情報化社会になった今日、TVだけでなくインターネットを通じ様々情報が飛び交う中では、全てが本当のこととは限らない。むしろ物事のある一面だけがクローズアップされているのが普通であるし、またその一面ですら、報道する側の視点に色付けされている可能性がある。にもかかわらずそれらの情報を全て正しいという風に思い込んでいては、思わぬ被害を受けることになりかねない。

非科学的なものに対する思い込みの研究はこれまで成されてきている。伊藤(1995)は「非科学的なことが

ら」を「俗信」と総称し、それらを「超自然的なことがら」「占い」「血液型性格判断」などに分類し、それらがどう捉えられているかについて研究を行っている。菊池(1998)は超常現象を簡単に信じてしまう心理的な情報処理過程に焦点を当て、その要因と構造について視覚や記憶などの誤った認知や推論におけるバイアスなどを用いて説明している。しかし思い込みは非科学的なものに対するものだけではとどまらない。非科学的な思い込みだけに限らず、先の例であげたような日常生活の中での思い込みにも焦点を当て、包括的・総合的に思い込みに対する態度を捉え、その全体像を浮き彫りにしていくべきだろう。田村(2006a)は思い込みに対する態度として迷信、習慣、規範を抽出し、非科学的なもの以外も含めて思い込みへの態度が区別されることを明らかにしている。しかし態度は思い込みに対する表象的な思考に過ぎず、思い込みを無くしていくためにはその態度がどのようなプロセスを経て形成されているのかを明らかにしなければならない。そのためには思い込みだけを取り上げるのではなく、その背後に潜む認知過程を明らかにする必要がある。

FIGURE1は思い込みに関連すると考えられる要因の関係性をモデル化したものである。思い込みは物事を認知する際の捉え方によって生じるため、当然認知の能力、スタイルは影響すると考えられる。記憶の不足

によって思い違いが生じたり、認知スタイルによって思考に偏りが生じそれが思い込みとなったりといったことが考えられる。また逆に思い込んでいることによって認知が歪められることもあるだろう。幸運の石なるものを持っていることで、良いことが起これば全て石のおかげだと考えることなどがいい例だ。

パーソナリティは人の思考や行動様式の集約とも言え、思い込みへの態度にも影響があることが考えられる。「思い込みの激しい人物」というときには心配性な人も自信過剰な人もそれに含まれている。しかしこの2つの性格は反対といってもいい。心配性な人は他人の言動を気にし、それを思い込みの対象とし、一方自信過剰な人は自分の考えを信じ、それが思い込みの対象となる。思い込みの対象を決める要素の一つとしてその当人のパーソナリティが影響を与えているということである。詫摩・松井ら(1985)は血液型によって性格が異なるという信念を血液型ステレオタイプと命名し、血液型ステレオタイプを持つ人は持たない人に比べて親和欲求、追従欲求、回帰性傾向、社会的外向性が高いとしている。

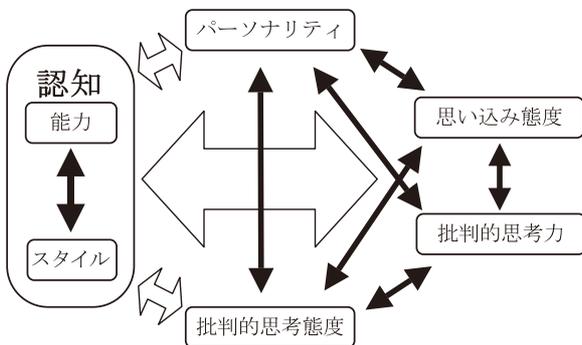


FIGURE 1 思い込み態度の認知モデル

また最近ではパーソナリティ5因子であるBig Fiveにも認知的な側面が加えられており(村上ら、1999)、パーソナリティの認知面への関連性も見出されてきている。

批判的思考は、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考であり、何を信じ、主張し、行動するかへの決定に焦点を当てる思考である。またクリティカルシンキングとも呼ばれ、論理的で誤りの少ない合理的な処理を促進するものとして注目されている。廣岡ら(2000)はクリティカルシンキングが、自己の個人的体験だけにに基づき容易に結論を導き出すこと、自明の理と呼ばれるテーゼを無批判に思考に援用すること、単純なヒューリスティックを利用した情報処理などと対極に位置づけられるとしている。また平山ら(2004)は批判的思考態度によって、信念バイアスを回避できると示している。この信念バイアスは論理の妥当性ではなく、結論が自分の信念と一致しているかどうかによって、結論の妥当性を判断するバイアスのことで、信じること、思い込むことによって生じる思考の弊害で

ある。これらのことは思い込みを批判的に見ることによってその弊害を排除できる可能性を示唆している。また廣岡ら(2000)はクリティカルシンキングを能力・技術と志向性の二つに分けた中で、重要なのは志向性であるとしている。しかし、この志向性と実際の能力・スキル・パフォーマンスとの関連性を分析する必要があることは指摘しており、クリティカルシンキングの個人差を評価する場合には能力と志向性の両側面から行うことが重要であるとしている。これらのことから批判的思考は能力と態度という二つの要素に分けて捉え、思い込みとの関連を捉えていくことが必要である。またパーソナリティは思い込みだけでなく、批判的思考への影響が考えられる。廣岡ら(2001)はクリティカルシンキングの志向性と認知欲求や対人志向性との関連を見出しており、平山(2004)も批判的態度が保守—進取、非共感—共感といった性格特性との関連性を確認している。

本研究ではこのモデルの中でも特に思い込み態度とパーソナリティ、批判的思考力、批判的思考態度について焦点を当てる。批判的思考によって思い込みが排除される可能性については先に述べたとおりだが、この可能性については批判的思考力と思い込み態度の関連性を検討する必要がある。これは思い込みへの批判的態度が実際に批判的能力を伴っているかどうかの検討であり、思い込み態度と批判的思考力の相互の関係を明らかにすることは重要である。また同時に批判的思考態度もその能力を伴っているか、類似の思い込みへの批判的態度を誘発できるかを検討する必要がある。思い込み態度への影響は批判的態度、批判的思考力の両側面から捉えていく。またそれらに関してのパーソナリティの影響も捉えていく。思い込みへの影響は先にも述べたが、同時に批判的思考態度、批判的思考力へのパーソナリティの関連を見ることは、批判的思考の位置づけにおいて重要であり、かつそれを身に付けることへ近づき、思い込みへの対策にもつながる可能性もあるだろう。

2. 研究 I

2.1. 目的

思い込みに対する批判的態度が日常見られるような問題に対しても発揮されるかどうかを知ることは重要であると考えられる。課題としては久原ら(1983)の批判的思考力テストを用いた。このテストでは日常的問題で経験的手続き的な知識がない際に、与えられている情報や常識を使って推論の適切さ、解釈の確かさの程度を評価する能力を批判的思考力と位置づけており、本研究の目的に適していると考えられる。またこのテストは「ワトソン・グレーザー批判的思考力テスト」を元に作成されており、その有用性は廣岡ら(2001)でも示唆されている。批判的思考能力測定の妥当性が

あると考えていいだろう。

更に素朴概念課題を用いた。素朴概念は自然現象について初心者が持つ、経験や常識的理解に基づいた一貫した誤概念のことである。この日常の中の経験から得られる誤概念という性質は、迷信や習慣などの思い込みと類似しており思い込みへの批判的能力を測る指標となる。

研究1ではこれらを批判的思考力課題とし、思い込み態度と批判的思考力との関連性を探ることを目的とした。

2.2. 方法

被験者：和歌山大学の学生660名。そのうち記入の仕方が明らかに異常であると判断した11名を除いた649名(男419女230)を分析の対象とした。

材料：批判的思考力の課題として、久原ら(1983)の批判的思考力テストのSM問題から3問、TM問題から1問の計4問を用いた。素朴概念の課題は米澤・磯濱(1998)から4問を用いた。思い込み態度尺度33項目は、田村・米澤(2006a)で作成したものをを用いた。

手続き：講義中に集団で実施した。批判的思考力テストは「真」「たぶん真」「材料不足」「たぶん偽」「偽」の5件法で求めた。素朴概念課題はそれぞれの問題に対応した回答を3件法で求めた。思い込み態度尺度は、思い込みと判断するかどうかに対しては「思い込みだと思ふ」「やや思い込みだと思ふ」「どちらともいえない」「あまり思い込みだと思わない」「思い込みだと思わない」の5件法で回答を求め、そう思うかどうかに対しては「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の5件法で求めた。

2.3. 結果

2.3.1. 正答率・得点の比較

批判的思考力には推論タイプが設定されており、そのまま用いた。タイプ1はクラスの形式的推論—「個々の要素について真なら、全体についての全称否定は偽である」「全体について真なら、その要素についても真である」という推論、タイプ2はクラスのファジイ推論—「いくつもの要素について真であれば、全体についてもたぶん真」「全体について、はっきりした傾向があれば、要素についても、その傾向はたぶんある」という推論、タイプ3は省略のあるファジイ条件文推理—「大前提を常識的知識で補うと、条件文推理の形で導き出される推論、タイプ4は前提の認定—与えられた情報の前提となっていることからの認定という推論の4つである。各推論タイプの項目は推論タイプ1=2-3,4-3、推論タイプ2=1-2,1-3,2-2,3-1,3-3,3-4,4-2,4-6、推論タイプ3=1-1,2-4,2-5,3-2,4-4,4-5、推論タイプ4=1-4,2-1,4-1,4-7である。各問、推論タイプ、全体で正答率を算出し、久原らのものとカイ2乗検定による度数比較で行った(TABLE 1)。3-4は本研究の方が有意に高く、2-1、2-4、2-5、3-1、4-2は久原の方が有意に高く、推論タイプ4、全体でも久原の方が有意に高かった。また1問を1点で換算し得点化

を行い、久原が9.36であったのに対し本研究では8.67であり、得点についてもt検定による比較を行ったところ、1%水準で有意に本研究の方が低かった。

素朴概念についても正答率を算出し、米澤・磯濱のものと比較を行った(TABLE 2)。問2は米澤・磯濱の方が有意に高く、問3は本研究の方が有意に高かったが、全体では有意差は見られなかった。

TABLE 1 批判的思考力テストの正答率比較

項目番号	原著番号	正答率	
		田村	久原
a1-1	補助教材(1)	51.9	54.8
a1-2	補助教材(2)	53.6	55.4
a1-3	補助教材(3)	47.1	54.2
a1-4	補助教材(4)	66.4	65.1
a2-1	ブラウン氏(1)	18.2	48.2**
a2-2	ブラウン氏(2)	51.2	59.6
a2-3	ブラウン氏(3)	6.9	10.8
a2-4	ブラウン氏(4)	69.7	78.9*
a2-5	ブラウン氏(5)	60.2	68.7*
a3-1	新生児死亡率(1)	53.2	66.9**
a3-2	新生児死亡率(2)	42.0	45.8
a3-3	新生児死亡率(3)	50.5	54.2
a3-4	新生児死亡率(4)	40.5**	23.5
a4-1	コンピュータによる教育(1)	34.1	30.7
a4-2	コンピュータによる教育(2)	33.7	44.0*
a4-3	コンピュータによる教育(3)	22.1	18.7
a4-4	コンピュータによる教育(4)	54.4	48.8
a4-5	コンピュータによる教育(5)	50.2	46.4
a4-6	コンピュータによる教育(6)	48.6	42.8
a4-7	コンピュータによる教育(7)	14.3	9.0
	推論タイプ1	14.5	14.8
	推論タイプ2	47.3	50.1
	推論タイプ3	54.7	57.2
	推論タイプ4	33.2	38.3*
	批判的思考力	43.4	46.3**

*=p<.05 **=p<.01

TABLE 2 素朴概念課題の正答率比較

項目番号	原著番号	正答率	
		田村	米澤・磯濱
b1	(4) 氷の水面	40.4	43.6
b2	(6) 箱の鳥	20.6	28.2*
b3	(11) 投げ上げ	27.0**	9.6
b4	(12) 途中落下	25.2	25.5
素朴概念		28.3	26.7

*=p<.05 **=p<.01

2.3.2. 因子分析

思い込み態度尺度は、これまでの研究から因子数を3因子として主因子法による因子分析を行ったところ、因子構造が田村・米澤(2006a; 2006b)とは異なる結果となった。そこですべてのデータを統合して因子分析を行ったところ因子構造がこれまでと同じになったため、田村・米澤(2006a)と同じ項目を用いた。負荷量が.3未満のものがあつたが、当該因子で一番負荷量が高いのでそのまま用いた。各因子の信頼性を検討するため、 α 係数を算出した結果、迷信批判の α =.807、習

慣批判の $\alpha = .818$ 、規範批判の $\alpha = .785$ 、迷信肯定の $\alpha = .817$ 、習慣肯定の $\alpha = .803$ 、規範肯定の $\alpha = .671$ であった。

2.3.3. 相関分析

思い込み態度の各因子と批判的思考力、素朴概念課題の関係性を調べるために相関分析を行った(TABLE 3)。

迷信批判は習慣批判、推論タイプ4、批判的思考力、素朴概念問4との間に有意な正の相関が見られた。また規範批判、迷信肯定、習慣肯定との間に有意な負の相関が見られた。習慣批判は迷信批判、推論タイプ1、推論タイプ3、推論タイプ4、批判的思考力との間に有意な正の相関が見られた。また規範批判、迷信肯定、習慣肯定との間に有意な負の相関が見られた。規範批判は迷信肯定、習慣肯定、素朴概念問3との間に有意な正の相関が見られた。また迷信批判、習慣批判、規範肯定、推論タイプ1、推論タイプ2、推論タイプ3、推論タイプ4、批判的思考力との間に有意な負の相関が見られた。迷信肯定は規範批判、習慣肯定との間に有意な正の相関が見られた。また迷信批判、習慣批判、素朴概念問4との間に有意な負の相関が見られた。習慣肯定は規範批判、迷信肯定、素朴概念問3との間に有意な正の相関が見られた。また迷信批判、習慣批判、推論タイプ3、批判的思考力との間に有意な負の相関が見られた。規範肯定は推論タイプ1、推論タイプ2、推論タイプ3、推論タイプ4、批判的思考力との間に有意な正の相関が見られた。また規範批判、素朴概念問3、素朴概念合計との間に有意な負の相関が見られた。

TABLE 3 各因子の相関

項目番号	迷信批判	習慣批判	規範批判	迷信肯定	習慣肯定	規範肯定
迷信批判						
習慣批判	.423**					
規範批判	-.193**	-.176**				
迷信肯定	-.548**	-.224**	.083*			
習慣肯定	-.194**	-.594**	.133**	.360**		
規範肯定	.068	.075	-.488**	.042	-.047	
推論タイプ1	.046	.083*	-.129**	.024	-.041	.078*
推論タイプ2	.051	.052	-.085*	.014	-.038	.114**
推論タイプ3	.021	.152**	-.206**	-.039	-.112**	.206**
推論タイプ4	.150**	.128**	-.169**	-.058	-.033	.185**
批判的思考力	.095*	.158**	-.223**	-.042	-.093*	.237**
素朴概念問1	.031	.039	-.046	-.028	-.042	-.030
素朴概念問2	.022	.008	-.001	-.022	-.024	-.069
素朴概念問3	-.020	-.049	.101*	.031	.093*	-.108**
素朴概念問4	.084*	.036	.011	-.128**	-.037	-.038
素朴概念	.054	.017	.028	-.068	.016	-.113**

*=p<.05 **=p<.01

2.3.4. 分散分析 (批判的思考力、素朴概念課題)

思い込み態度と批判的思考力、素朴概念課題との関係性をより詳細に調べるために批判的思考力、素朴概念課題を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

推論タイプ1は規範批判のときのみ有意[F(2,545)=4.05,p<.05]で、規範批判が低いときに高かった。推論タイプ2は規範肯定のときのみ有意[F(2,545)=3.13,p<.05]で、規範肯定が高いときに高かった。推論タイプ3は習慣批判[F(2,545)=4.95,p<.01]、規範批判[F(2,545)=7.59,p<.01]、規範肯定[F(2,545)=6.46,p<.01]のときに有意で、習慣批判、規範肯定が高いとき、規範批判が低いときに高かった。推論タイプ4は迷信批判[F(2,545)=5.74,p<.01]、習慣批判[F(2,545)=4.11,p<.05]、規範批判[F(2,545)=12.87,p<.01]、規範肯定のときに有意で、迷信批判、習慣批判、規範肯定が高いとき、規範批判が低いときに高かった。批判的思考力全体では習慣批判[F(2,545)=6.83,p<.01]、規範批判[F(2,545)=11.52,p<.01]、規範肯定[F(2,545)=12.76,p<.01]のときに有意で、習慣批判、規範肯定が高いとき、規範批判が低いときに高い。

素朴概念問1はどこにも有意差は見られなかった。素朴概念問2は規範批判のときのみ有意[F(2,545)=4.46,p<.05]で、規範批判が高いとき高かった。素朴概念問3は習慣批判[F(2,545)=3.72,p<.05]、規範肯定[F(2,545)=6.49,p<.01]のときに有意で、習慣批判、規範肯定が低いとき高かった。素朴概念問4はどこにも有意差は見られなかった。素朴概念全体では、規範批判のときのみ有意[F(2,545)=3.62,p<.05]で、規範批判が中のとき高かった。

2.4. 考察

正答率の比較では本研究と久原の間で有意差が見られ、批判的思考力テストの信頼性を脅かす結果が示された。しかし、久原の結果においては推論タイプ1に属する問題の正答率が18.7~21.1、推論タイプ2に属する問題の正答率が25.9~60.8、推論タイプ3に属する問題の正答率が44.0~84.3、推論タイプ4に属する問題の正答率が9.6~86.1とばらつきが大きく、本研究の正答率で有意差が見られたものでもその範囲を逸脱してはいない。また得点の方でも差が見られたが、SDにはそれほど差が見られなかった。以上のことから本研究ではこの批判的思考力テストをそのまま分析に用いた。素朴概念については問2と3で有意差が見られたが、全体では有意差が見られなかったため、妥当だと判断した。

思い込み態度因子同士の相関についてだが、迷信、習慣、規範ともに批判と肯定の間に負の相関が見られたこと、迷信と習慣の批判、肯定でそれぞれ正の相関が見られたこと、迷信批判と習慣肯定、習慣批判と迷信肯定で負の相関が見られたことは同じで、思い込みと判断したことは信じがたく、信じたものは思い込みと思わない傾向、迷信と習慣への態度が似たもので、どちらかに批判的であればもう一方も同じように捉える傾向が示された。規範批判は迷信批判、習慣批判、規範肯定と負の相関、迷信肯定、習慣肯定と正の相関が見られたのに対し、規範肯定は規範批判との負の相関しか見られていない。迷信や習慣を信じやすいと規範に対し反発して批判し、同時に迷信や習慣を思い込

みと思わなくなるが、規範を肯定するかどうかは迷信や習慣を思い込みと思う、信じることには影響しないことが示された。これは田村・米澤(2006a)とは異なる結果であり、今後より詳細に思い込み因子間での関係性を分析していく必要性を示唆している。

思い込み態度因子と批判的思考力との相関では、規範は批判、肯定ともに推論タイプの全てとその合計である批判的思考力との間に有意な相関が見られ、規範を思い込みだと判断すれば批判的思考力が低く、規範を重んじれば批判的思考力が高くなることが示された。規範への批判的態度は周りのルールへの反発の傾向があり、研究2では状況への批判の傾向が強いため、問題の前提となる状況自体に反発し、適切に状況と推論の検討をできなかったことが考えられる。逆に規範を重んじることは自他の関係に注目できる傾向にあり、それによって証拠となる問題場面と推論との関係性を把握できたと考えられる。また習慣批判は推論タイプ3、4、批判的思考力全体と、習慣肯定は推論タイプ3、4、批判的思考力全体と相関が見られ、習慣に批判的であれば批判的思考力が高くなることが示された。推論タイプ3、4はどちらも前提を想定するタイプの推論であり、習慣への批判は研究2で論理的な枠組みへのアプローチが強い傾向が示されており、前提についての枠組みである推論が高くなったと考えられる。迷信批判は推論タイプ4、批判的思考力全体は相関があったのに対し、迷信肯定は差が見られなかった。迷信への批判的態度は証拠を重視する傾向が研究1で示されており、推論タイプ4の前提の認定の推論では前提となることがらを根拠として取り上げることができ、高くなったと考えられる。

素朴概念課題との相関では、素朴概念問3が規範批判、習慣肯定と正、規範肯定と負の相関があり、素朴概念全体でも規範肯定と負の相関があり、批判的思考力とは逆の傾向が示された。規範への批判は周りのルールへの反発で自己の思い入れの強い態度であり、習慣肯定も自己を中心とした態度傾向が見られており、自己の論理を重視する傾向が強い方が、正答が高くなっている。これは周りの模範的な考えよりも自分の考えを貫くことが素朴概念課題を突破することに必要で、規範や周りの常識的な考えを重んじると正答できないことが考えられる。

分散分析の結果では、迷信批判が推論タイプ4に、習慣批判が推論タイプ3・4、全体、規範批判が推論タイプ3・4、全体、規範肯定が推論タイプ3・4、全体への有意な効果が見られ、相関と同じく推論タイプ3・4への、習慣批判、規範批判、規範肯定の影響が色濃いことが示された。推論タイプ4にいたっては迷信批判の効果も見られ、前提を捉えるタイプの推論への批判的な態度は思い込みの態度の影響が強いようだ。また迷信、習慣の肯定には全く効果が見られなかったことから、

迷信や習慣を信じることと批判的思考力は特に関係しないもので、相関が見られたのは肯定しないことが批判を強めることになり、その影響が見られたものと考えられる。

素朴概念課題については、問2で規範批判、問3で習慣批判と規範肯定の効果が見られ、全体としては規範批判の効果が見られた。批判的思考力と逆の傾向を示すことについては相関でも述べたが、全体の傾向として影響が見られたのが規範批判だというのは注目すべきだ。素朴概念という日常的な経験から得られた常識的な概念は、規範への批判的な態度のように周りの当たり前のルールに対しても疑いをかけ、反発的な意識で思考することが有効だということを示唆するものである。

本研究をまとめると、身の周りの習慣意識に対する論理的な批判意識や規範を重視する自他関係の注目視点が今回のような推論課題にも有用で、批判的思考力へと結びついており、特に前提を推論するものへの影響が強いことが示された。また素朴概念のような常識的に培われた課題を突破するには規範への反発のような周りに捉われない態度を持つことが必要だということが示された。

3. 研究 II

3.1. 目的

研究1では思い込み態度と批判的思考力の関連性が見出された。批判的思考は態度と能力の二側面から捉えていくことが廣岡ら(2001)が指摘しており、批判的思考態度と批判的思考力についても探っていく必要があると考えられる。批判的態度に関しては、平山(2004)が作成した批判的態度尺度があるが、これは廣岡ら(2001)の作成したクリティカルシンキング志向性尺度を元にしたものである。廣岡らは志向性を能力や傾向性があるかどうかは別として、それをしたいと思っているかどうかを問題にしたものと位置づけているが、その中で弁別が困難であることも指摘している。態度と志向性は分かちがたいもので、項目レベルでの弁別は非常に困難であると考えられ、本研究では廣岡ら(2001)のクリティカルシンキング志向性と平山ら(2004)の批判的態度を全て用いて批判的態度の傾向性として捉え、用いることにした。また思い込み態度にパーソナリティが関連することは田村・米澤(2006a)で示唆されたが、批判的思考力、批判的思考態度らとの関連性は見出されていない。

研究2で思い込み態度、批判的思考力、批判的思考態度、パーソナリティの総合的な関連性を探ることを目的とした。

3.2. 方法

被験者: 和歌山大学の学生254名(男137女116不明1)。

材料: 思い込み態度尺度33項目に対し「思い込みと思うかどうか」「そう思うかどうか」の2通りの問い方をした。

批判的思考力の課題は研究3と同じく、久原ら(1983)の批判的思考力テストのSM問題から3問、TM問題から1問の計4問を用いた。批判的態度に関しては、平山ら(2004)が作成した批判的態度尺度の全33項目、廣岡ら(2001)のクリティカルシンキング志向性尺度の中から平山の尺度と重複していない下位因子項目33項目を用いた。パーソナリティに関しては研究1で思い込みと関係性の多かった尺度、項目を用いた。自意識尺度は全21項目、他者意識尺度の全15項目、自己愛人格目録短縮版(小塩,1998)の下位因子の優越感・有能感の項目10項目と原文では他の因子であったが研究1で優越感・有能感因子として用いた1項目を併せた11項目、親和動機尺度(岡島,1988)の下位因子の注目の項目7項目と原文では他の因子であったが研究1で注目として用いた2項目を併せた9項目、依存欲求尺度(田中,2003)の下位因子の精神的支え7項目と原文では他の因子であったが研究1で精神的支えとして用いた1項目を併せた7項目、同じく依存欲求尺度の下位因子の道具的支援の5項目を用いた。また独自にメタ認知に関する態度項目を作成し7項目を用いた。これらを併せた質問紙を作成し用いた。

手続き: 講義中に集団で実施した。思い込み判断は、「思い込みだと思う」「やや思い込みだと思う」「どちらともいえない」「あまり思い込みだと思わない」「思い込みだと思わない」の5件法、そう思うかは「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の5件法、批判的思考力テストは「真」「たぶん真」「材料不足」「たぶん偽」「偽」の5件法、批判的思考態度は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法、クリティカルシンキング志向性は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「まったくあてはまらない」の7件法、自意識尺度は「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法、他者意識尺度は「全くそうだ」「そうだ」「どちらともいえない」「ちがう」「全くちがう」の5件法、下位因子で抜き出したパーソナリティの項目はまとめて「とてもあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法でそれぞれ回答を求めた。

3.3. 結果

3.3.1. 因子分析

それぞれの尺度ごとに主因子法による探索的因子分析を行った。思い込み態度尺度はこれまでの研究から3因子として主因子法による因子分析を行いプロマックスしたところ、因子構造がこれまでの研究とは異なり、思い込み肯定において「いつも人が私を悩ませる」が

迷信因子に負荷する結果となった。よって「いつも人が私を悩ませる」を除外し、残りを各因子の項目とし、これまで同様批判、肯定とも迷信、習慣、規範とした。批判的思考態度尺度は4因子でプロマックス回転し、負荷量が.3未満の「何事も、少しも疑わずに信じ込んだりはしない」を除外した。第1因子は原論文同様、論理的思考の自覚とした。第2因子は原論文同様、探求心とした。第3因子は原論文同様、客観性とした。第4因子は原論文同様、証拠の重視とした。クリティカルシンキング志向性は固有値の変動および解釈可能性から7因子でプロマックス回転し、負荷量が.3未満の「興奮状態でものごとを決めたりせず、冷静な態度で判断をくだす」、「人がなぜそういう行動をとったのかを考えることがある」を除外した。第1因子は「判断をくだす際には、自分の都合にとらわれないようにする」や「いろいろな立場を考慮する」など自分と他人の意見を偏りなく見ようとする態度の項目が多かったので不偏性とした。第2因子は原論文同様、脱軽信とした。第3因子は原論文同様、真正性とした。第4因子は原文の柔軟性に含まれる項目が多く、「他の人の考えを尊重できる」など他人の考えを認めようとする態度の項目が多かったので柔軟性とした。第5因子は原論文同様、脱直観とした。第6因子は原論文同様、決断力とした。第7因子は「独断的で頑固な態度にならない」など自己への戒めの態度の項目が多かったので自戒とした。自意識尺度は2因子でバリマックス回転し、負荷量が.4未満の「自分を反省してることが多い」、「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」を除外した。第1因子は原論文同様、公的自意識とした。第2因子は原論文同様、私的自意識とした。他者意識尺度は3因子でバリマックス回転したところ因子構造が原文とまったく同じだったので全ての項目を用いた。第1因子は内的他者意識、第2因子は外的他者意識、第3因子は空想的他者意識とした。下位因子だけを抜き出したパーソナリティ尺度に関しては、まず依存欲求尺度の項目だけを抜き出して主因子法で因子分析を行った。2因子プロマックス回転の結果、第1因子は原論文同様、精神的支えとした。第2因子は原論文同様、道具的支援とした。ただし、「自分が頼りにする人には、私のわがままを受け入れてほしい」は原論文では精神的支えであったが、内容的に齟齬がないと判断し道具的支援で用いた。残りのパーソナリティ尺度は固有値の変動および解釈可能性から3因子でバリマックス回転をし、負荷量が.3未満の「2, 3人の人と非常に親密な友情をもてれば、満足である」、「私をあまり肯定してくれない人と一緒にいたくない」、「いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう」、「仕事で、あるいは、別の場面で自分が何をしてよいのかわからないとき、手がかりとして人を見る」を除外した (TABLE 4)。第1因子は原論文と同様、優越感・有能感とした。第2因子は独自に作成し

たメタ認知に関する項目のみで構成されていたのでメタ認知とした。第3因子は原論文と同様、注目とした。

TABLE 4 優越感・有能感、メタ認知、注目尺度

	I	II	III	共通性
h18 私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う	.828	.256	.007	.751
h31 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.807	.153	-.026	.675
h2 私は、周りの人達より有能な人間であると思う	.796	.124	-.059	.652
h1 私は、才能に恵まれた人間であると思う	.772	.144	.022	.618
h20 私は、周りの人が学ぶだけの儲け打ちな長所を持っている	.705	.178	.002	.528
h15 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	.690	.276	.073	.558
h16 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	.606	.210	-.109	.423
h36 私が言えは、どんなことでもみんな信用してくれる	.580	.069	-.082	.347
h37 周りの人達が自分のことを良い人間だといってくれるので、自分でもそんな人だと思う	.520	.166	.005	.297
h22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	.470	.061	-.012	.224
h38 問題に取り組んでいると進み具合を確認し、現状の方法を見直すことができる	.177	.785	.001	.647
h17 問題に取り組むときに、問題の位置づけ、意義、特質を考慮することができる	.340	.703	-.037	.611
h23 問題に取り組むとき、その問題の内容で重要なところを見つけることができる	.343	.691	.100	.605
h27 問題を解決するときには、その問題にあわせてやり方を変えることができる	.199	.656	-.005	.470
h11 問題に取り組むとき、難易度を判断してそれに適した方法を見つけることができる	.382	.624	-.026	.536
h3 問題に取り組むときに、自分に解決できるか見通しを立てることができる	.197	.561	.115	.367
h12 自分の注意力や集中力について考えたり、他人と比較したりすることができる	.156	.398	.222	.233
h7 2,3人の人と非常に親密な友情をもてれば、満足である	-.055	.168	.086	.039
h25 私らしさや私のすることに共感してくれる人のそばにいたいと思う	-.143	.068	.676	.482
h35 私の存在価値を認め、大切に思ってくれる人のそばにいたい	-.046	.055	.663	.444
h9 周りの人が私の存在に気づき、私らしさを認めてくれたらいいと思う	.038	.025	.647	.421
h8 好感を持てる人と友達になれると非常に満足する	-.200	.145	.624	.450
h4 私に惹かれて、夢中になってくれるひとと一緒にいたい	.004	.063	.547	.303
h14 いろいろな人と一緒にいて、その人たちについて知ることが興味深い	.146	.159	.371	.184
h33 私をあまり肯定してくれない人と一緒にいたくない	.092	-.108	.297	.108
h5 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまふ	.222	-.048	.291	.137
h29 仕事で、あるいは、別の場面で自分が何をしたいのかわからないとき、手がかりとして人を見る	-.093	.163	.291	.119
平方和	5.40	3.32	2.51	
寄与率	20.01	12.30	9.29	41.590

各因子の信頼性を検討するため α 係数を算出した。迷信批判: $\alpha = .811$ 、習慣批判: $\alpha = .800$ 、規範批判: $\alpha = .701$ 、迷信肯定: $\alpha = .786$ 、習慣肯定: $\alpha = .794$ 、規範肯定: $\alpha = .663$ 、論理的思考の自覚: $\alpha = .867$ 、探究心: $\alpha = .814$ 、客観性: $\alpha = .754$ 、証拠の重視: $\alpha = .658$ 、不偏性: $\alpha = .866$ 、脱軽信: $\alpha = .768$ 、真正性: $\alpha = .843$ 、柔軟性: $\alpha = .582$ 、脱直観: $\alpha = .676$ 、決断力: $\alpha = .666$ 、自戒: $\alpha = .598$ 、公的自意識: $\alpha = .893$ 、私的自意識: $\alpha = .844$ 、内的他者意識: $\alpha = .849$ 、外的他者意識: $\alpha = .777$ 、空想的他者意識: $\alpha = .867$ 、精神的支え: $\alpha = .804$ 、道具的支援: $\alpha = .771$ 、優越感・有能感: $\alpha = .905$ 、メタ認知: $\alpha = .857$ 、注目: $\alpha = .750$ であった。

3.3.2. 重回帰分析

思い込み態度、批判的思考力のそれぞれにおいて批判的思考態度、パーソナリティがどのような影響を与えるのかを調べるために思い込み態度、批判的思考力のそれぞれを従属変数においたステップワイズ法による重回帰分析を行った。思い込み態度と批判的思考力の互いの影響も調べるために思い込み態度を従属変数としたときには批判的思考力も独立変数に、批判的思考力を従属変数としたときには思い込み態度も独立変数に加えた。

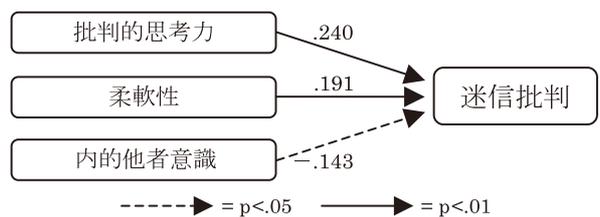


FIGURE 2 迷信批判モデル

迷信批判では批判的思考力、柔軟性が高く、内的他者意識が低い人ほど迷信に対して批判的になることが示された(FIGURE 2)。

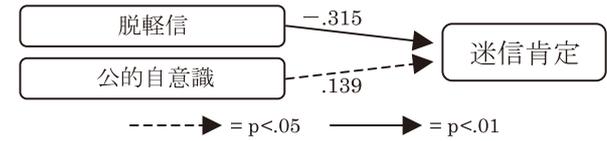


FIGURE 3 迷信肯定モデル

迷信肯定では公的自意識が高く、脱軽信が低い人ほど迷信に対し肯定的になることが示された(FIGURE 3)。

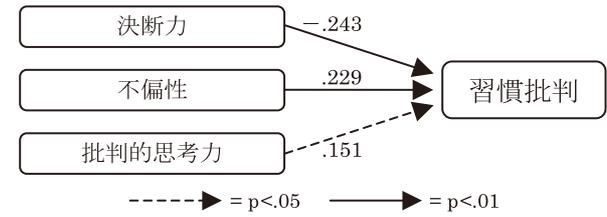


FIGURE 4 習慣批判モデル

習慣批判では不偏性、批判的思考力が高く、決断力が低い人ほど習慣に対して批判的になった(FIGURE 4)。

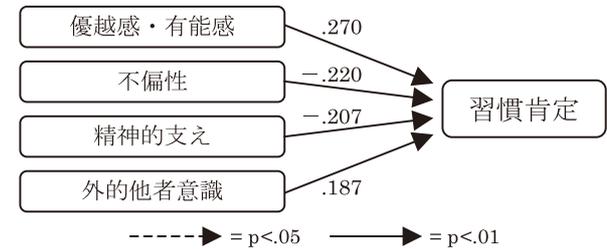


FIGURE 5 習慣肯定モデル

習慣肯定では優越感・有能感、外的他者意識が高く、不偏性、精神的支えが低い人ほど習慣に対して肯定的になることが示された(FIGURE 5)。

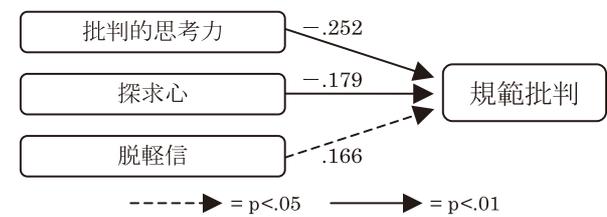


FIGURE 6 規範批判モデル

規範批判では脱軽信が高く、批判的思考力、探究心が低い人ほど規範に対して批判的になった(FIGURE 6)。

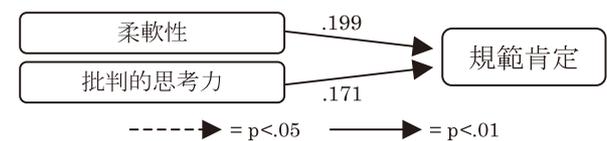


FIGURE 7 規範肯定モデル

規範肯定では柔軟性、批判的思考力が高い人ほど規

範に対して肯定的になることが示された (FIGURE 7)。

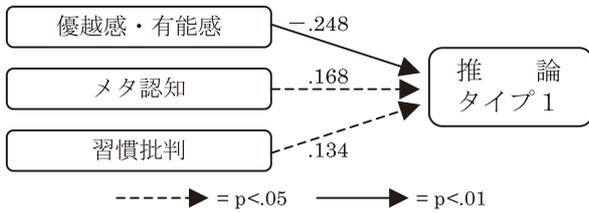


FIGURE 8 推論タイプ1モデル

推論タイプ1ではメタ認知、習慣批判が高く、優越感・有能感が低い人ほど正答率が高くなった (FIGURE 8)。

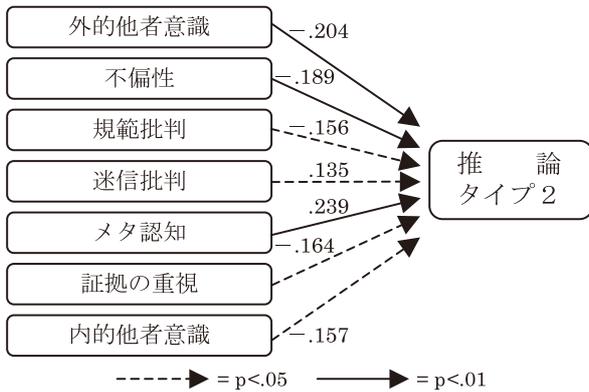


FIGURE 9 推論タイプ2モデル

推論タイプ2では迷信批判、メタ認知が高く、外的他者意識、不偏性、規範批判、証拠の重視、内的他者が低い人ほど正答率が高くなることを示された (FIGURE 9)。

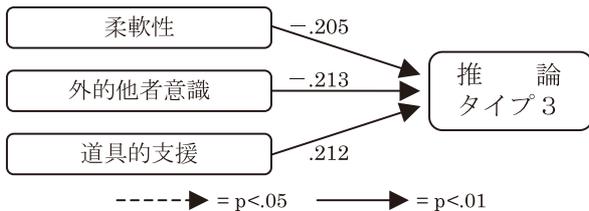


FIGURE 10 推論タイプ3モデル

推論タイプ3では道具的支援が高く、柔軟性、外的他者意識が低い人ほど正答率が高くなった (FIGURE 10)。

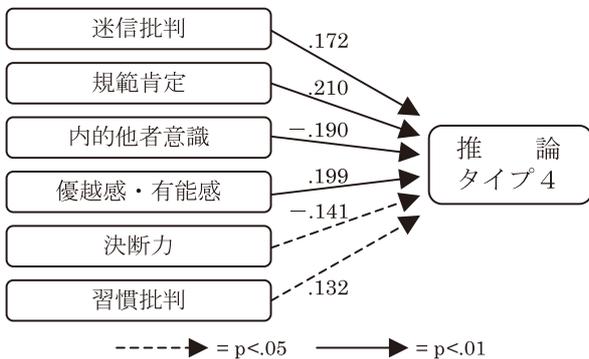


FIGURE 11 推論タイプ4モデル

推論タイプ4では迷信批判、規範肯定、優越感・有能

感、習慣批判が高く、内的他者意識、決断力が低い人ほど正答率が高くなることを示された (FIGURE 11)。

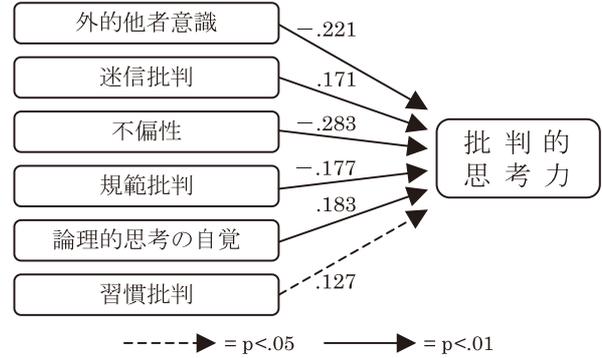


FIGURE 12 批判的思考力モデル

批判的思考力では迷信批判、論理的思考の自覚、習慣批判が高く、外的他者意識、不偏性、規範批判が低い人ほど批判的思考力が高くなった (FIGURE 12)。

3.4. 考察

まず思い込み態度に関してだが、パーソナリティの影響から考察していく。迷信批判は柔軟性、内的他者意識があり、他者の意見を取り入れる柔軟性を持って、他者の内面に捉われない人ほど迷信に対し思いこみだと判断しやすいことが示された。また迷信肯定ではうわさを疑うことなく、他者から見ての自己を意識している人ほど迷信を信じやすいことが示された。田村 (2006a) で見られた他者への依存心が見られなくなっているが、他者を意識して自己を捉えようとする傾向、うわさを疑わないという根拠を軽視する傾向これまでの研究との傾向に一致する結果と言える。習慣批判では決断しきらず自己と他者の意見を公平に不偏的に捉えようとする人ほど習慣を思い込みと判断しやすいことが示された。習慣肯定では優越感・有能感を持ち他者を頼りにせず、不偏的に考えず外面を重視する人ほど習慣を信じやすいことが示された。批判する場合には不偏的な視点に立つが、信じる場合には不偏的な視点を無視し自信を持っている態度は、これまでの自己を中心としている傾向が田村 (2006a)、視点的に物事を捉える傾向が田村 (2006b) に一致する結果となっている。規範批判では様々なものや新しいものへの関わりを求めず、疑いの視点を持っている人ほど規範を思いこみと判断しやすいことが示された。規範肯定は柔軟性を持っている人ほど規範を信じやすいことが示された。他者というよりは他のものとの関係を遮断するか、柔軟に受け入れるかが批判肯定の決め手のようで、そういう点では田村 (2006a) の関係性重視、田村 (2006b) の状況重視の傾向に通じる結果と言える。また規範批判には疑いの傾向が強く、規範に対する批判意識が当たり前なことへの反発意識の傾向が示された研究1と一致する結果となった。

批判的思考力との関連を見ていくと、迷信批判、習慣批判、規範批判、規範肯定で批判的思考力が入っており、相関同様迷信や習慣を思い込みと判断し、規範を重んじ批判的にならない人ほど批判的思考力が高くなることが示された。やはり規範批判とは負の関数にあり、規範に対する批判のような疑いの傾向の批判的態度では推論を成り立たせることにはならないと考えられる。反対に規範肯定は肯定的態度ではあるが論理的に考えた上での受け入れということを表しているので批判的思考力との関連があると考えられる。

批判的思考力に関してまずパーソナリティの影響から見ていく。推論タイプ2で内的他者意識と外的他者意識、推論タイプ3で外的他者意識、推論タイプ4で内的他者意識が入っており、批判的思考力全体でも外的他者意識があり、相関同様他者意識が高いと批判的思考力が低くなる傾向が示された。また批判的思考態度の影響は推論タイプ2に不偏性、証拠の重視、推論タイプ3で柔軟性、推論タイプ4で決断力が入っているが、全て負の負荷であり、相関同様批判的思考態度が高くなると逆に批判的思考力が低くなるという結果が示された。不偏性や柔軟性は相関でも述べたが、様々な意見・考えを許容することになり推論を妨げる結果となることが考えられる。決断力は吟味をせず決断する傾向となり浅薄な判断を導く要因、証拠の重視は確実なことしか考慮しない推論の放棄の要因となっていることが考えられる。しかし批判的思考力全体で見ると論理的思考の自覚が正の負荷で入っており、論理的に思考することは批判的思考力に必要なことが示され、推論を検証という思考には他の要因によって推論をぶれさせることなく論理的に思考することが必要だということが示されたと言える。

これらを考慮すると本研究での批判的思考力と批判的思考態度の負の関数にも納得がいくが、本研究で取り上げた批判的思考態度が本当の意味での批判的思考の態度としての性質を持っているかという疑問が湧く。しかし思い込み態度との関連においては批判的な態度との結びつきを見せており、不偏性や柔軟性といった様々な意見や考えを考慮することは思い込みを無くすという意味では批判的な思考になりうると考えられる。そしてそれとは別に他者や他の要因を排除した上で論理的な推論のみを吟味する批判的思考というものが存在していると考えられる。批判的思考態度は思い込み態度、批判的思考力の双方に関連があるが、その過程は異なるものであり一様に捉えることはできず、批判的思考態度とは何なのかということをもう一度捉えなおす必要があるだろう。同時に批判的思考力についてもその課題の内容を考え直す必要がある。批判的思考力と思い込み態度とは関連が見られたものの、批判的態度からその性質の違いが示されており、思い込みを無くすという過程を探るためには思い込み

を無くすことを直接、もしくは間接でも近しくそれを測定できる課題を模索していくことは今後の課題である。

まとめると、迷信の柔軟な姿勢での批判、習慣の不偏的な視点での批判、規範の公的関係に対する柔軟な肯定の態度を持つこと、疑いすぎる批判的な態度を持たないことは論理的な批判的思考力と影響し合っているが、幅広い意味での批判的思考態度とは結びつかないことが示唆された。

4. 総合考察

迷信、習慣の批判的態度は柔軟性、不偏性、客観性といった幅広い多視点的な要因で共通していると言える。規範の批判と肯定は迷信や習慣と異なり、批判的である方が思い込みの傾向が示されたが、それはこの多視点的、柔軟的要因の有無の影響だと考えられる。規範の肯定は自他関係への注目の有無が影響していることが示されたが、自他関係に注目することは広い視野で自他を捉えることで多視点的と言えよう。反対に規範の批判は周りへの反発であり、疑いの傾向が強く、多視点的ではなく懐疑的と言える。研究3では迷信、習慣の両方の批判的態度は規範への反発意識である批判の影響があることが示されたが、この懐疑的な態度が原因となり迷信や習慣を思い込みだと判断する周りの流れに反発して起こっている可能性がある。そうならば、正当に迷信や習慣を信じていることによる批判的態度の減少ではないため肯定には影響を及ぼさなかったと考えられる。ならば迷信や習慣を信じることに加え、規範への反発も含めた上での思い込みを無くすためにはなおさらこの多視点的、柔軟的な思考態度が必要であると考えられる。この場合の多視点的な思考態度が思い込みに対する批判的の性質を持つなら多視点的な視点はただ多視点であるのではなく、多視点的かつその視点の中で選び出す吟味の能力も必要であり、それを含んだ思考態度である。しかしそこでそのような思考態度が批判的思考能力を伴っているのかということが疑われる。本研究ではそのために批判的思考力との関連性も調べたわけだが、その結果としては不偏性や柔軟性は批判的思考を阻害する要因となっているという結果が示されている。が、ここで考えるべきは批判的思考とは何かということである。本研究で取り上げた批判的思考力の課題は推論の正当性、妥当性を検証するというものであり、これに対しては不偏性など多視点的な思考態度は不要でむしろ論理的な思考態度が必要とされていたと考えられる。つまり批判的思考態度は論理的な思考態度と多視点的な思考態度の要因を持ち、論理的な思考態度は推論に、多視点的な思考態度は思い込みに対して有効性を持っているのではないかと考えられる (FIGURE 13参照)。

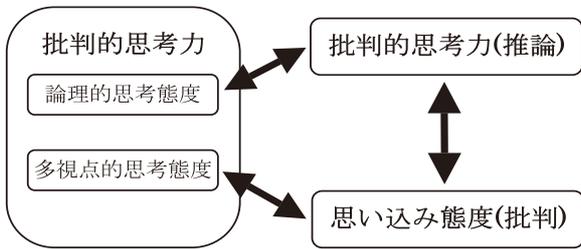


FIGURE 13 思い込み態度と批判的思考の関連モデル

しかし思い込み態度と推論の批判的思考とは関連性が見出されており、批判的思考の中の論理的思考態度と多視点的思考態度を対象や場面によって使い分ける認知能力とでも言えるような大きな枠組みが背後に存在している可能性も考えられるので、今後は当初のモデルで示した認知能力についても探っていく必要がある。

本研究では思い込み同様、批判的思考も、一言で表すことができず、何を対象とするかどんな場面でどう思考することを必要としているかによって様々に捉えることができることがわかった。それは批判的思考だけでなく、批判的思考態度にも言えることである。先に述べたように多視点的な思考態度と論理的な思考態度があるのにそれを一つにまとめてしまえば批判的思考の姿を摸とさせてしまうだけである。平山ら(2004)は批判的思考を「推論を吟味する」とその定義の中で述べているが、その態度尺度の内容は客観性や探求心といった多視点的に物事を理解しようとする態度が多く、混同されてしまっている危険がある。批判的思考を捉え直し、そのそれぞれの側面を明確にした上でそれに対応する批判的思考力、批判的思考態度を探っていく必要があるだろう。それらを混同しては廣岡らが目指すクリシン教育のような批判的思考を生活の中で利用する教育にも活かしかねないだろう。

今後の課題としては、思い込み態度に関してもその課題面でもより検討を重ねていく必要がある。本研究では思い込みへの批判的態度が実際に思い込みを排除する力を伴っていると断言できる課題選択ではなかったと言える。より現実の思い込む瞬間を取り出し、思い込みの発生の段階からそれを排除できるかどうかを検証できる課題を模索していくことが必要だ。またその際には新たな思い込みの発生を抑制することだけでなく、既存の思い込みを排除するという視点でも考えていかななくてはならない。むしろ既存の思い込みを排除の方がその解決策の探索としては困難かもしれない。しかし本研究で批判的思考態度や批判的思考力との関連が見出されたことは有意義であり、それらを手がかりとして思い込みを排除する方法、スキルの開発、認知・思考支援を目指していくことが望まれる。

引用文献

Gilovich, T. 1993 守一雄・守秀子(訳) 人間この信じやすき

- もの一迷信・誤信はどうして生まれるのか— 新曜社。
 平山るみ・楠見 孝 2004 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討— 教育心理学研究,52,186-198。
 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 2000 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要,51,161-173。
 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・齊藤和志 2001 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究(2) 三重大学教育実践総合センター紀要,21,93-102。
 久原恵子・井上尚美・波多野誼余夫 1983 批判的思考力とその測定 読書科学,27,131-142。
 伊藤哲司 1995 「俗信を信じる」ということ 茨城大学人文学部紀要人文学科,28,25-56。
 伊藤哲司 1997 俗信はどう捉えられているか—「俗信を信じる」ことのモデル構成に向けて— 茨城大学人文学部紀要人文学科,30,1-31。
 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性役割選択—性差観スケール(SGC)作成の試み 教育心理学研究,45,396-404。
 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究,6,184-192。
 菊地 聡 1998 超常現象をなぜ信じるのか—思い込みを生む「体験」のあやうさ— 講談社。
 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究,46,280-290。
 松村千賀子 1991 日本版 Irrational Belief Test(JIBT)開発に関する研究 心理学研究,62(2),106-113。
 村上宣寛・村上千恵子 1999 性格は五次元だった—性格心理学入門— 培風館。
 村元美代・渡辺雄二・青木 宏 1996 おいしさおよび食選択に影響をおよぼす「思い込み」の効果 大妻女子大学紀要家政系,32,61-74。
 岡島京子 1998 親和動機測定尺度の作成 教育心理学会第30回大会発表論文集,864-865。
 桜井茂男・下山晃司・黒田祐二 2004 大学生における内発的動機付けの測定に関する予備的研究 日本心理学会第68回大会発表論文集,903。
 菅原健介 1984 自己意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究,55,184-188。
 詫摩武俊・松井 豊 1985 血液型ステレオタイプについて 東京都立大学人文学部人文学報,172,15-30。
 田村圭佑・米澤好史 2006a 思い込み態度尺度構成の試み 和歌山大学教育学部紀要—教育科学—,56,19-31。
 田村圭佑・米澤好史 2006b 思い込みの構造分析—尺度構成と理由分類— 関西心理学会第118回大会発表論文集,74。
 田中 優 2003 依存欲求尺度の作成、および、信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要,4,229-239。
 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房。
 米澤好史 2002 論理的思考力と非科学的信念—学力低下論を批判する— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要,12,75-88。
 米澤好史・磯濱彰子 1998 物理現象に関する素朴概念の強固さの分析 和歌山大学教育学部紀要—教育科学—,48,31-44。
 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(心理学),46,53-73。